

オーストラリア最大の Matsuri チームをつくりたい

Matsuri Japan Festival 2018 スタッフ運営 山田宇人氏インタビュー

いよいよ 12 月 8 日に迫った Matsuri Japan Festival 2018。昨年度は 5 万人の来場者が集まり、大盛況となった。今回は 100 人を超えるボランティアスタッフのマネジメントを担当する山田宇人（やまだひろと）さんにインタビュー。彼自身日本でのフリーター生活から一念発起し、オーストラリアで現在は Matsuri ボランティアさん統括の傍、現地企業で会計士として働いている。そんな人生の転機を与えてくれたオーストラリアでのエピソードや、Matsuri にかける思い、また Matsuri ボランティアにトライする学生たちに向けたメッセージを伺った。

路頭に迷ったフリーター生活、自分自身を変えるためオーストラリア留学を決意

オーストラリアに住んで早 16 年になります。それまではずっと日本に住んでいました。高校を出てからはフリーター生活で、実は路頭に迷ってしまっていました。当時 1 年間ほど居酒屋でアルバイトをしていたのですが、そこでは自分と同年代の大学生が多くて、バイト中はいつもサークルやテストなど大学生活の話題がもちきりだったんですよ。「大学楽しそうでいいなあ、僕はここでバイトばかりしていて本当に良いのか。」って引け目のようなものを感じていました。大学生活を楽しんでいる同年代の彼らが自分とは全く違う存在のように感じてしまって、「ここには自分の居場所がない」と思うほどに。

「このままでいいのかな」と自分では思っていました。日本って一旦レールを外れてしまうと戻るのがなかなか難しいじゃないですか。本当に何をしたいのかわからなくて、そんなときに「海外に行く」という選択肢が浮かびました。「英語が話せれば将来食いつなげることはできるだろう」程度の本当に軽い考えでしたけどね（笑）。当時たまたま仲がよかったカナダ人の友人に留学を考えていると相談してみたところ、「カナダもいいけど寒いのが嫌ならオーストラリアがいいんじゃない？」と勧められ、渡豪を決めました（笑）。

お先真っ暗闇からオーストラリアは第二の人生を与えてくれた

日本人って英語の読み書きはできますけど、話せないですよ。それは何故かという、生の英語を聞いたことがないからなんです。いきなりネイティブと話しても今まで教科書で習ってきたような「How are you?」なんて全く使ってこないから、どうしたらいいかわからなくなっちゃうんですよ（笑）。

最初は僕も「もし分からないときは紙に書いてくれ」って頼んで、メモを使って外国人と会話していました。当時は全く英語が話せなかったけれどコミュニケーションはなんとかとれて、英語が使えなくても何とか生きていけるって自信が湧きましたね（笑）。オーストラリアのおかげで、海外で暮らすことに対して自分の中でハードルが下がりました。

最初は語学学校に通っていたのですが、思いの外順調に英語力が伸び、大学編入を決めました。ただ大学に入った方がいいものの行きたかった学部のオファーがもらえず、結局その大学は途中で辞めてしまいました。当時 25 歳くらいでしたが人生の節目の一つである 30 歳を目前とし、自分の将来についてもう一度真剣に考えました。もともとビジネスを勉強したかったということもあり「オーストラリアで会計士になりたい」と改めて決意し、大学にまた再挑戦しました。再チャレンジした大学は無事卒業し、現在 Matsuri 以外の時間は現地企業で会計士として働いています。

社会のレールを外れたってオーストラリア人は誰も気にしない（笑）

こんなに失敗を繰り返しても、僕がオーストラリアに居続けたいと思えた理由は、日本での生活とのギャップの大きさだと思います。日本にいたときは自分自身全く生き活きとしていない自覚がありました。でもオーストラリアに来てからは紆余曲折こそあったものの、「自分でこの道を選んだのだ。」と噛み締めて生きている実感が湧きます。

シドニーではいろんな国の人がまさに共存していて、互いを受け入れる雰囲気がありますね。僕が日本社会のレールを外れてしまったことなんて誰も気にしませんから（笑）。日本だと 20 歳過ぎ頃には将来を決めていないといけない雰囲気があると思いますが、オーストラリアでは基本 20 代は好きなことをやって、30 代から本格的に将来について考え始めている人も多いと思います。一旦就職してから会社をやめてまた大学に入り直す方もたくさんいますし、オーストラリア人はとてもフレキシブルですね。

Matsuri を通じて日本の方にオーストラリア生活をもっと Enjoy してもらいたい

正直日本人との交流は渡豪して以来あまりなかったのですが、3 年前ほどにやっと自分の生活にも自由が生まれてきて「日本人として日本のために何かしたい」と思い始め、日系コミュニティの方々と交流をもつようになりました。それがきっかけで Matsuri を知り、運営に携わることになりました。

オーストラリア人にもっと日本の魅力を知ってほしいという思いもちろんありますが、オーストラリアに住む日本人のみなさんにオーストラリアでの生活をもっと楽しんでもらいたい、と強く思っています。

す。オーストラリアは日本と比べても物価がかなり高いですし、勉強や仕事も競争率が高いので日本人の留学生やワーホリの方々にとって結構苦勞が多いと思うんですよ。そんな逆境の中でも頑張っている若い方達にもっとオーストラリアでの生活を楽しんでもらいたいです。

Matsuri は日本に興味のある外国人と日本人のみなさんをつなげる場でもあります。海外で暮らすことの醍醐味って外国人とコミュニケーションをとることだと思うので、そういった意味で Matsuri はこれ以上ないチャンスだと思います。

僕自身オーストラリアですごく楽しい経験をさせていただいたので、今度はみなさんに還元していきたいですね。「オーストラリアに来たけど意外と外国人と関われないなあ」と悩んでいる留学生の方などにはぜひ参加してほしいです。

みんなで苦勞を乗り越えたあとに打ち上げで飲むビールは最高！！

僕自身学生時代は文化祭実行委員会とかやっていたくらいイベント自体がすごく好きで、イベントを楽しんでいるみなさんの笑顔を見るととても嬉しいです。規模が大きくなるほど苦勞も当然増えるのですが、それをみんなで乗り越えて打ち上げで飲むビールは最高ですね！！美味しいお酒を飲むためにやっているといっても過言ではありません（笑）。

去年は5万人の来場者が集まったのですが、桁が大きすぎて僕個人だったら想像もつかなかったですね。当日のボランティアも100人ほど集まってくれたのですが、僕はボランティアマネジメント担当だったので一人ひとりと接することができました。だからこそ一人ひとりの力が Matsuri 全体の結束力に繋がっていることを直接体感しました。

Matsuri を通じて僕自身も普段なかなか会えない方々と一緒に仕事ができるので学べることがたくさんあります。特に学生さん達は新たな視点をいつも気づかせてくれるので得るものがとても多いです。僕の人生においても Matsuri はとても貴重な経験です。

「日本人はなぜすぐセンキューと言うのか」 Matsuri でその真意を感じて欲しい

お祭り当日はステージ上で日本文化にちなんだパフォーマンスを楽しむことができます。例えば空手のような日本の伝統スポーツ、アニメやコスプレなどサブカルチャーも体験できます。また日本のお祭りではおなじみの屋台の出店もあるので日本の食文化も楽しめます。また書道や折り紙、茶道のワークシ

ヨップなどもあるので、実際に日本文化を体感することができます。運営を手伝ってくれるボランティアスタッフも日本人だけでなく、オーストラリア人もたくさん参加してくれるので Matsuri を通じてみなさんが交流できることも魅力です。

今年の Matsuri のテーマは「ありがとう- appreciation-」ということもあり、オーストラリア人に日本人の感謝の気持ちを大切にできる感性を伝えていきたいです。オーストラリアに来てから「自分は日本で生まれ育った」という事実を僕自身のアイデンティティとして捉えるようになりました。

日本人ってお辞儀をするって言われるじゃないですか。すぐに「ソーリーソーリー」「センキューセンキュー」って言うよね、って（笑）。でもそれって日本人は自分が誰かに何かしてもらったことに対する感謝の気持ちが強くて、それを表現したいと思うからだと思います。今回の Matsuri ではなぜ日本人がそういう行動をとるのかっていうところをオーストラリア人に感じとって欲しいですね。

年の差なんて関係なし！メンバー全員で Matsuri チームをつくっていききたい

今年の Matsuri では、僕はボランティア学生の方のマネジメントを担当していますが、学生さんにはボランティアに参加する意義をぜひ考えていただきたいです。ボランティアって一言で言えば「無償のお仕事」ですが、人それぞれ得るものが違うと思います。「何か役に立ちたい」と思って参加する人もいれば、自身のスキルを身につけたい、経験を積みたいという人もいます。あとはシンプルに「祭りが大好き！」という人ももちろんいますよね。

僕も Matsuri を通じて何かしら得てほしいと思うので、参加する学生さんの「やりたい」という気持ちを大事にして、何かアイデアがあれば積極的に実現する機会をつくり、意欲のある方にはどんどん責任のあるポジションを任せていきます。僕自身マネジメントという立場ですが、全員でチームを一緒につくっていく感覚に近いです。

「やりたい」という意志さえあれば、あとは行動するのみです。「ボランティアってどのくらい時間拘束されるの？」「スキルとか経験って必要なの？」など様々な不安を抱える方が特に日本人学生に多いと思います。でも少しでも興味があるのならそういう細かいことは気にせず、まずは「ノリ」でトライしてみてください！一緒にオーストラリア最大のお祭りにしましょう！

インタビュー担当：Takaki Sayako